

21世紀COEプログラム 平成15年度採択拠点事業結果報告書

1. 機関の 代表者 (学長)	(大学名)	神奈川大学	機関番号	32702
	(ふりがな<ローマ字>) (氏名)	NAKAJIMA MICHIO 中島 三千男		

2. 大学の将来構想

研究教育目標と計画

神奈川大学は、2003年度21世紀COEプログラムへの申請にあたり、学長のマネジメント体制の下で教学改革を行い、研究分野では世界的な研究拠点を構築し、高度な専門職業人を育成することを目標とした。

現在、我が国の高等教育は、いわゆる「ユニバーサル化」の波のもと、個性ある大学の発展とともに、学士課程教育の充実が課題となっている。また高度専門職業人の育成機関および国際的競争力のある研究拠点としての大学院の充実が求められている。本学においては、このような社会的動向を背景に、学士課程教育については導入教育の充実、教育方法の改革、高等学校との高大連携プログラム等を推進している。大学院については、法化社会の到来を見越した法科大学院の設置、昼夜開講制による社会人教育を推進し、高度専門化社会における専門的職業人の育成を目指している。

研究活動については、研究資源の集中化・高度化、及び共同研究を推進する中、21世紀COEプログラム拠点「人類文化研究のための非文字資料の体系化」では、画像・身体技法・環境等に刻印されてきた諸事象等の非文字資料を対象として、人類文化の総体を捉えるための方法論の開発、体系的に収集・整理された資料群の提供、資料に対する適切・鋭敏な感覚を有する専門家の育成を目指した。これまでの研究では取上げられることの少なかった非文字資料の体系化は、社会と文化の奥行きを深く理解することを可能にすると同時に、抽象的に語られがちであった異文化理解に具体的な内容を与え、より根底的な国際理解を促進するための基礎的方法を提供するものとした。

しかしながら、非文字資料の研究方法論・資料組織論は、世界的に見ても未だ確立されているとは言い難い。本プログラムは、日本常民文化研究所・歴史民俗資料学研究所の長年にわたる社会・人文諸科学の学際的研究・調査活動、非文字資料の研究業績、文献史料と民俗民具資料を体系的に扱える人材育成の実績を基礎にこの課題に挑戦するものである。

学長を中心とするマネジメント

(1) 予算措置：

本学における研究資金は、学内研究資金制度及び学

外研究資金制度のデュアルサポートシステムによって支えられているが、学内研究資金制度については、新たに2003年度から教育・研究重点予算を学長のもとで編成する方針が確立され、歴史民俗資料学研究所・日本常民文化研究所からも「地域研究成果の社会的還元事業」等の予算申請がなされた。21世紀COEプログラムに係る研究経費についても、学長主管の教育・研究重点予算において対応がなされる。

(2) 研究教育組織：

本学の研究教育組織は、学長のもとに、学部（評議会 学部長会 学部教授会）・大学院（大学院委員会 大学院研究科委員会）に対応した審議機関が設置されている。しかし、地球規模の諸課題に対応するためには、学際的な総合化、外部機関・研究者との共同研究の推進、研究資金の積極的導入を図る必要がある。そのために、学長のもとに研究支援組織を再編し、研究支援スタッフの整備・充実、学内外の学術情報の効果的利用を推し進める諸課題があり、教学改革委員会のもとで「総合学生支援センター」「総合メディアセンター」「研究支援センター」構想の検討が2004年度からの組織整備に向けて総合的に行われている。本組織発足後、21世紀COEプログラムは、研究支援センターのもとで委員会として位置づけられる。

(3) 施設・スペースの整備：

本プログラムの拠点形成に係る専用の施設・設備としては、現在、9号館に日本常民文化研究所（所長室、会議室、事務室、書庫）、歴史民俗資料学研究所（教員・院生研究室、共同研究室、実験・実習室、図書室）、3号館に日本常民文化研究所附属施設（展示室、古文書修復室）が設置されている。今後は、COEの専用施設を確保するとともに、将来的には研究所付属施設の博物館相当施設への拡充を計画する。

(4) 研究者及び研究支援者の措置：

本プログラムの事業推進担当者は、本学教員20名で構成するが、学外から専門研究者を共同研究員として招聘するほか、研究の進展状況に応じて、適宜、調査研究協力者、専門知識の提供者の協力も求める。また、大学院生のCOE研究員への採用、課程修了者・学位取得者の研究所特別研究員への採用を行い、外国人研究員の受入れも予定している。

3. 達成状況及び今後の展望

達成状況

学士課程教育の推進等については、学生による授業評価の実施、セメスター制への移行、導入教育としてのファースト・イヤー・セミナーやキャリア形成科目の開講等の諸改革を行うとともに、学生の学修・進路・学生生活を総合的に支援する総合学生サポート委員会、高度情報化社会への総合的な対応を目的とした総合メディア委員会等の新たな組織をたちあげた。今後も副専攻制度、GPA制度の導入などの諸改革を継続する。

他方「教育と研究の融合」の理念の下、研究活動や大学院制度の充実にも大きな力を注いできた。とくに、近年は学長のイニシアティブのもと、学術褒賞制度や共同研究奨励助成金制度、国際学術交流など学内における研究費の競争的・重点的配分を強化するとともに、2004年度には学術研究を専管する副学長を置き、その下に本学における研究活動を総合的に支援・推進する「総合学術研究推進委員会」を発足させた。この委員会は、学部、大学院、研究所を横断する研究活動に関する審議機関であり、21世紀COEプログラムやハイテク・リサーチセンター、学術フロンティア事業等の大型研究プロジェクトを管轄し、産官学の連携や研究成果の社会的還元、国際的な学術交流をより一層強力に推進して、本学が「個性輝く大学」・「国際競争力のある大学」となるためのセンター的機能を果たしている。また、この委員会のもとで、昨年度にはプロジェクト研究所制度や研究所客員教授制度が導入された。

拠点形成活動の側面については、支援組織として学長の下に研究担当副学長を委員長とする21世紀COE拠点形成委員会を置いた。研究を支援するために、学長の要請により5年間で1億800万円を大学が支弁した。専用施設としてCOE支援事務室、共同研究室、資料室、COE研究員(PD)研究室・同研究員(RA)研究室、分析作業室等、計6室、260.62㎡の専用施設を確保した。また、常民参考室(展示室)に隣接した260.89㎡を新たに収蔵展示室として確保した。支援事務組織としては、学長室直轄の「COE支援事務室」を新設し、専任の事務職員2名を配置し、業務専門性の高い派遣職員(編集、図書管理、経理事務等)を毎年3~7名採用した。この人件費及び事務局経費は、大学が負担した。

研究教育組織の改編という点では、主たる研究教育拠点であった歴史民俗資料学研究科に新しい科目群を新設した。すなわち、従来は「文献史料学」と「民俗民具資料学」の科目群が中心であったが、プログラム

の達成目標の一つである非文字資料を取り扱うことの出来る高度専門職学芸員の養成という課題に積極的に対応するため、2004年度から「博物館資料学」という科目群を新たに新設した。人員の面では、事業推進担当者(23名)の他に、COE共同研究員(29名)を委嘱し、さらにCOE教員(特任教授1名、非常勤講師3名)、を採用し、研究の推進と若手研究者の養成にあたった。また、調査研究協力者47名のほか専門知識の提供者多数の協力を得た。

その結果、学位授与数(2003年度1名、2004年度2名、2005年度3名、2006年度4名、2007年度4名)も増加した。また、若手研究者の育成のために、COE研究員(PD)(9名)、同(RA)(12名)を採用した。

今後の展望

2008年4月、21世紀COEプログラム終了後の研究拠点として「非文字資料研究センター」を設置した。このセンターは、歴史民俗資料学研究科及び日本常民文化研究所の活動と相俟って、今後のCOE研究活動の中心的拠点・センターとなる。また、21世紀COEプログラムで確保した施設は、2008年度からは基本的にこの非文字資料センターの施設として利用に供され、補助事業終了後の研究活動の中心的施設となる。

併せて、これらの施設と既存の日本常民文化研究所405.00㎡(所長室、会議室、事務室、書庫)、歴史民俗資料学研究科576.00㎡(教員・院生研究室、共同研究室、実験・実習室、図書室)、常民参考室(展示施設)369.25㎡等を一箇所に集めた日本常民文化研究所附属博物館構想を実現する予定である。さらに、歴史民俗資料学研究科はそれに接続する学部を持たなかったのを改め、将来的にこの拠点で活躍する人材の育成のため歴史民俗学部(仮称)を2010年度に新設することを検討している。

21世紀COEプログラムに端を発した計画の最終目標は、非文字資料に関する世界的水準の研究を推進すると同時に博物館機能を統合した本学独自の研究体制を確立し、世界に向けて研究成果を発信するとともに、次世代の人材を育成することである。

本学は本年創立80周年を迎えるに当たり、20年後の創立100周年に向けての将来構想計画を発表。その中で、本学は「地域社会そして地球規模の課題を解決する、世界を惹きつけ、世界に発信する」「トップ30の大学」を目指すことを宣言したが、この非文字資料研究を核とした新しい研究教育体制の構築はこの目標達成の先導役を果たすものである。

21世紀COEプログラム 平成15年度採択拠点事業結果報告書

機関名	神奈川大学		学長名	中島三千男	拠点番号	J 2 3
1. 申請分野	F<医学系> G<数学 物理学 地球科学> H<機械 土木 建築 その他工学> I<社会科学> J<文学 総合 新領域>					
2. 拠点のプログラム名 (英訳名)	人類文化研究のための非文字資料の体系化 (Systematization of Nonwritten Cultural Materials for the Study of Human Societies) 副題を添えている場合は、記入して下さい(和文のみ)					
研究分野及びキーワード	<研究分野 情報学>(社会情報システム)(歴史情報システム)(社会の防災力)(身体運動文化論)(地域間比較研究)					
3. 専攻等名	歴史民俗資料学研究科歴史民俗資料学専攻、日本常民文化研究所、外国語学研究科中国言語文化専攻					
4. 事業推進担当者	計 23名					
氏名	所属部局(専攻等)・職名	現在の専門学位	役割分担 (事業実施期間中の拠点形成計画における分担事項)			
(拠点リーダー) FUKUTA AJIO 福田 アジオ	歴史民俗資料学研究科・教授	民俗学 文学修士	総括及び博物館展示の研究・実験			
OSATO HIROAKI 大里 浩秋	外国語学研究科 中国言語文化専攻・教授	中国近代史 文学修士	近代東アジアにおける環境・景観の変化に関する調査研究 2005年4月1日追加 環境認識とその変遷の調査研究			
KATSUKI YOICHIRO 香月 洋一郎	日本常民文化研究所・教授	民俗学				
KAWADA JUNZO 川田 順造	歴史民俗資料学研究科 歴史民俗資料学専攻・教授	文化人類学 民族学博士	身体技法及び感性の比較研究 2006年3月31日退職にともない辞退			
KITAHARA ITOKO 北原 糸子	歴史民俗資料学研究科・教授	災害情報論 博士(文学)	環境に刻印された災害データの調査研究			
KITSUKAWA TOSHITADA 橘川 俊忠	歴史民俗資料学研究科・教授	政治学	地域統合情報発信の調査研究			
KONO MICHIAKI 河野 通明	日本常民文化研究所・教授	農業技術史 博士(文学)	身体技法と用具の関係性についての調査研究			
KOMMA TORU 小馬 徹	日本常民文化研究所・教授	社会人類学 博士(社会人類学)	非文字資料の理論総括研究 2007年3月31日新学部への配置換えにともない辞退			
SAITO TAKAHIRO 齋藤 隆弘	工学研究科 電気電子情報工学専攻・教授	情報環境工学 工学博士	情報発信のための画像処理法の開発			
SANO KENJI 佐野 賢治	歴史民俗資料学研究科・教授	民俗学 博士(文学)	地域統合情報発信の調査研究			
JOHN BOCCELLARI ジョン・ボッチャリ	歴史民俗資料学研究科・非常勤講師(東京大学大学院総合文化研究科 超域文化科学専攻・教授)	比較文化論 文学修士	『絵巻物による日本常民生活絵引』マルチ言語版の編さん			
SUZUKI YOICHI 鈴木 陽一	外国語学研究科 中国言語文化専攻・教授	中国文化論 文学修士	『東アジア生活絵引』の編さん			
SON AN SUK 孫 安石	外国語学研究科 中国言語文化専攻・准教授	東アジア交流史 博士(学術)	近代東アジアにおける環境・景観の変化に関する調査研究			
TAGAMI SHIGERU 田上 繁	歴史民俗資料学研究科・教授	日本経済史 経済学修士	高度専門職学芸員養成法の開発研究			
TAJIMA YOSHIYA 田島 佳也	日本常民文化研究所・教授	日本経済史 経済学修士	『日本近世・近代生活絵引』の編さん			
NAKAJIMA MICHIO 中島 三千男	歴史民俗資料学研究科歴史民俗資料学専攻・教授	日本近代史 文学修士	環境・景観に刻印された歴史の解析 2007年4月1日学長就任のため2007年3月31日辞退			
NAKAMURA MASANORI 中村 政則	歴史民俗資料学研究科歴史民俗資料学専攻・教授	現代史 経済学博士	地域統合情報発信方法の研究開発 2007年3月31日退職にともない辞退			
NISHI KAZUO 西 和夫	日本常民文化研究所・教授	日本建築史 工学博士	『日本近世・近代生活絵引』の編さん			
HIROTA RITSUKO 廣田 律子	歴史民俗資料学研究科・教授	中国民俗学 文学修士	身体技法の比較研究			
MAEDA YOSHIHIKO 前田 禎彦	歴史民俗資料学研究科・准教授	日本古代史 文学修士	『絵巻物による日本常民生活絵引』マルチ言語版の編さん 2006年4月1日追加			
MATOBA AKIHIRO 的場 昭弘	歴史民俗資料学研究科・教授	社会思想史 経済学博士	非文字資料の理論総括研究 2006年4月1日追加			
MIKI SEIICHIRO 三鬼 清一郎	歴史民俗資料学研究科 歴史民俗資料学専攻・教授	日本近世史 文学修士	環境・景観に刻印された歴史像の調査研究 2006年3月31日退職にともない辞退			
YAMAGUCHI KENJI 山口 建治	外国語学研究科 中国言語文化専攻・教授	中国民間文学 文学修士	芸能所作における身体技法の調査研究			
5. 交付経費(単位:千円)千円未満は切り捨てる(): 間接経費						
年度(平成)	1 5	1 6	1 7	1 8	1 9	合 計
交付金額(千)	61,000	75,000	95,000	88,940 (8,894)	87,000 (8,700)	406,940

6. 拠点形成の目的

基本目標 人類文化研究は、従来、文字・文章で表現された資料に限定されてきたきらいがある。しかし、人間諸活動の表現形態は、文字・文章にとどまらず、多様な形態をとっている。むしろ、文字の世界に比較できないほど文字に表現されない事象は多く、内容は豊かである。しかも、非文字資料は、特定の文字・言語に拘束されないが故に普遍性を有し、人類文化に等しく適用できる方法として世界に提供できる。本拠点においては、非文字の事象を研究対象として、それらを資料化し、体系的に収集・整理・分析して、人類文化研究に対して発信提供する方法を確立する。

ただし、限られた期間内で無限ともいべき膨大な非文字事象を対象にすることは不可能である。先ず5年間では図像、身体技法、環境・景観の三つに絞って、資料化を達成し、発信することに目標を明確にした。

学際的目標 本課題は、主に文化人類学・民俗学・歴史学等から提起されたものであり、研究成果は、それら個別学問分野に新たな情報を提供することになる。同時に、資料の解析において文化財科学・情報学・環境学等との学際的協同が不可欠であり、また、成果は各分野の研究に新たな領域を開く可能性がある。例えば、身体技法のように残りにくい事象の資料化は新しい文化財のカテゴリーを追加し、環境認識の資料化が今日の環境問題を再検討する契機になり、災害情報も多く含む図像・環境資料は災害史にとって貴重なデータとなる。さらに、文化情報発信の新技术の開発は、教育学と情報学を結合させることによって可能になると同時に、両研究分野に非文字資料に関する情報発信という新しい問題を提起することになるであろう。それが、未だ経験の域を出ない議論が多い博物館学を理論化して高度な水準に到達させることにもなる。

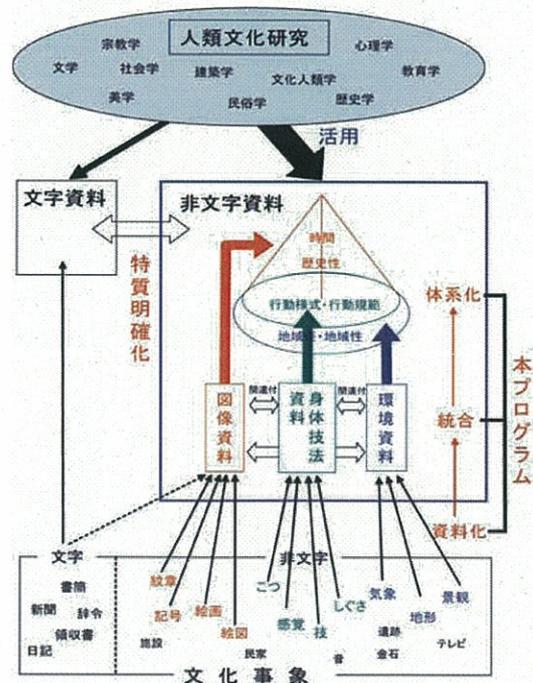
拠点の特色 本拠点のユニークさは、非文字資料を中核とした人間諸活動の総体に関わる資料群を調査・研究の対象にし、資料群の相互関係を体系的に捉える点にある。たしかに図像については美術館、民具等については博物館、文書・図書に関しては図書館・文書館など、それぞれ収集・整理・保存・公開する多様な機関が存在している。しかし、そうした機関はいかに大規模で、よく整備され、優れた業績をあげていたとしても、多くの場合、それぞれが対象とする資料の扱いにのみ特化しており、資料群全体を対象とし、それらを人類文化の総体を明らかにするために情報

化するような研究は行っていない。あるいは、図像は美術として、民具は物自体としてしか見られないように、資料を見る視角も特定されている。しかし、図像は貴重な生活記録としての性格を持ち、民具は身体技法と結びつけてはじめて生産・生活用具としての意味を明確にする。

研究者養成 このような拠点形成は他に類例を見ない特色であるが、本拠点では、非文字資料を中心として人類文化の総体を捉えるための体系的方法を身につけ、しかも資料に対する鋭敏な感覚を有し、世界的に活躍できる専門研究者の養成を図る。そのために、海外の研究機関と提携関係を結び、若手研究者の相互訪問による交流を進める。

世界的ネットワークの形成 こうした資料群の体系化は、方法的に普遍性を持つが故に、国境を越えた研究者の交流を可能にし、さらに活発化させるばかりではなく、日本発の問題提起として国際的な学界への貢献となるであろう。本拠点の研究調査活動および同じ方法に立つ国際的活動による資料の集積は、本プログラム終了以降にむしろ本格化し、世界的なネットワークを形成し、学問領域を超えた学際的研究へと発展する大きな可能性を持つものと言ってよいであろう。そのことを確実にするために、形成された拠点を非文字資料研究センターとして維持発展させる。

非文字資料の体系化 概念図



7. 研究実施計画

当初 4 つの研究テーマを設定し、テーマごとに研究チームを編成したが、中間評価を経て、以下の 6 研究チームによって研究を展開することに変更した。

() **図像資料の体系化と情報発信** 日本常民文化研究所編纂の『絵巻物による日本常民生活絵引』全 5 巻の世界化を図るとともに、それを継承した絵引編纂を行う。

本文の英訳及び図のキャプションにフランス語・中国語・韓国語訳、日本語を付したマルチ言語版を編纂し、最終年度までに全巻を刊行する。

日本近世・近代生活絵引の編纂のため資料の収集と解析を行い、それに基づき絵引を編纂し刊行する。

東アジア生活絵引編纂のための資料収集を行い、データベース化を進め、絵引の試案本を編纂する。

() **身体技法および感性の資料化と体系化**

身体技法の調査・分析法の開発と身体技法の比較研究を、日本および世界各地で行う。

感性把握の方法論的研究を、アナール学派の検討を経て、日本及びヨーロッパで実験的調査を実施する。

道具と人間の動作の関係の分析を、日本を中心に、東アジア・ヨーロッパでの民具と身体動作との関連も調査し、比較研究を行う。

() **環境と景観の資料化と体系化**

映像資料による景観の時系列的な研究を、日本常民文化研究所所蔵の約 80 年以前に撮影された映像資料を基に東アジア各地での現地調査を実施して行う。

環境認識とその変遷の研究を、日本の農山漁村での長期定点現地調査を実施して行う。

環境に刻印された人間活動や自然災害の痕跡等を解読する方法の開発とそれによるデータ化を、日本及び中国における現地調査を通して行う。

() **地域統合情報発信**

、 の研究プロジェクトの成果を組み込みつつ、非文字資料を文化情報として発信する方法を開発する。

特定地域、具体的には福島県只見町、において図像、身体技法、環境・景観の各資料を統合し、地域情報として発信することで、体系化を図る。

() **実験展示**

図像、身体技法、環境・景観を博物館展示という方法で統合し、展示の中に非文字資料の全体像を示すと共に、新たな展示技法を開発する。

非文字資料を専門的に取り扱う学芸員の大学院における養成策を検討し、具体化する。

() **理論総括研究**

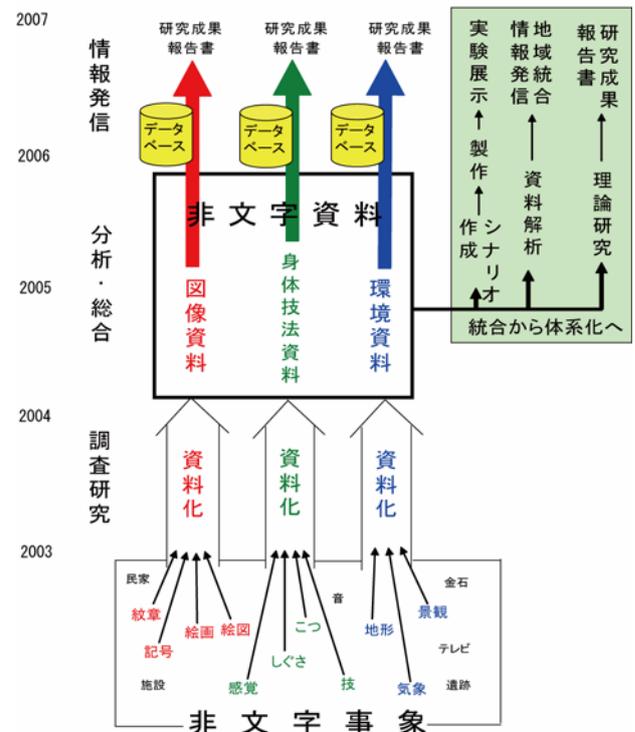
図像、身体技法、環境・景観を統一的に捉え、資料として活用する前提としての、理論的諸問題を検討する。

共同研究 研究拠点実施計画を実現するために、事業推進担当者を中心に学内外の研究者を組織し、共同研究を行う。各年度の研究計画に基づいて、特定研究への傾斜配置を行い、年次計画の進行にともない再配置する。

海外提携機関 非文字資料研究の方法を世界に発信するために、海外研究者の参加を求める。すでに、韓国延世大学、中国の北京師範大学、華東師範大学、浙江大学、香港大学、カナダのプリティッシュコロンビア大学等と具体的に協議に入っており、事業の開始とともにネットワークの形成を具体化する。

研究推進会議 拠点リーダー、サブリーダー 2 名及

研究展開構想図



び研究遂行責任者 3 名で研究推進会議を組織し、各チームの研究を適切に展開させるために、研究全体を調整し、事業推進担当者を指導する。また各年度ごとに関連分野の研究者による外部評価を受ける。

8. 教育実施計画

拠点形成の過程において、研究と教育の一体化による世界水準の研究者の養成、及びその裾野としての幅広い専門的職業人の訓練、また世界各国の学生及び研究者の大幅な受け入れによる国際化を図る。中核となる歴史民俗資料学研究科の具体的な実施計画は以下の通りである。

博士後期課程在籍の学生への教育 本研究科は、非文字資料の体系的な調査及び研究に関しては日本で唯一の大学院博士後期課程を持つ研究科であり、今までも専門家の養成は大いに期待されていた。21世紀COEプログラムにおいては、彼らを単に日本の専門家としてではなく、将来世界的水準の研究を担う研究者に育てることを大きな目標にしている。そのために、学生を在籍のままCOE研究員(RA)として採用し、事業推進担当者の指導を受けつつ調査研究課題を分担し、高度な研究能力を開発するようにする。特に、世界各地の研究者との交流を重視し、東アジア及び欧米の大学等研究機関に派遣する。なお、研究科としては、カリキュラムを改訂し、学生たちが世界的に活動できる外国語能力の向上を図るための授業科目の開設を計画し、また中国言語文化専攻との共通科目の開設を検討している。なお、研究能力の開発は博士後期課程に入ってから始めたのでは遅いので、前期課程から非文字資料を対象に含む研究方法を身につけるように前期課程・後期課程通して全体的なカリキュラムの改定も計画している。

課程修了者・学位取得若手研究者への教育と研究支援 本研究科では、すでに多くの者が課程博士の学位を取得し、また中途退学者が論文博士となっているが、今後COEの研究に加わることで、世界的に通用するより優れた学位論文を提出して学位を取得する者が増加することが見込まれる。彼らの研究を支援するため、日本常民文化研究所において特別研究員の制度を設け、課程修了者及び学位取得者を採用している。特別研究員には研究上の種々の便宜を与えると共に、研究所及び歴史民俗資料学研究科の国内における調査研究に参加する機会を作り、自己の研究を深められるようにしてきた。COEの拠点形成過程で彼らをCOE研究員(PD)として採用し、自己の研究課題を追究できるように研究に専念させ、さらに海外派遣制度を設け、海外において調査研究できる機会を作ると共に、拠点形成の一翼を担わせることで、よりいっそうの研究資

質向上を図る。

外国人留学生及び外国人研究員の受け入れ 本研究科ではすでにフランス・中国・韓国からの学生を後期課程学生として、また日本常民文化研究所ではアメリカ合衆国・カナダ・ブラジル・中国・韓国などの若手研究者を外国人研究員として受け入れてきており、国際的な交流と研究上の協力関係に大きな成果をあげているが、拠点形成過程でさらに外国人若手研究者との共同研究を推進する。また事業推進担当者が派遣され、そこからの出身者を受け入れている経験を生かして、世界各地の日本学研究の拠点との交流を深め、それらの機関からの研究者及び修了者を積極的に受け入れ、共同研究を展開する。そのことが拠点形成に大きく資するばかりでなく、在籍学生の研究にも大きな刺激となるものと予想している。日本で発達した非文字資料の資料化および分析の技法とそれによる研究は世界に対してモデルとして輸出可能であり、外国人留学生及び研究員の受け入れは、それを具体化する方法である。

高度専門職学芸員教育の実施 従来非文字資料を取り扱ってきた専門的職業は博物館・資料館などの学芸員であるが、日本の現状では学芸員は非文字資料に対処する理論も方法も体系的に学ぶことなく、経験のみに頼って調査研究に従事している。日本常民文化研究所では、博物館・資料館の学芸員などの専門職の資質向上に貢献するために毎年講座を開催し、各地の博物館・資料館の専門職員に対して講義と実技指導を行っているが、拠点形成過程でこれをさらに充実させ、客員研究員として受け入れ、指導をする。また、歴史民俗資料学研究科ではカリキュラム改定を行い、博物館学芸員に求められる高度な知識と見識を獲得できるような科目群を開設する。さらに、今後大学院に独立した学芸員課程を設置して、高度な水準の講義・実習科目を開講し、学芸員養成を行うための条件、制度的改変などを検討し、具体的な実施方法を盛り込んだ大学院における高度専門職学芸員養成策を提言する。それらを通して、博物館・資料館の専門職員の研究能力の向上を図り、欧米のキューレーターやアーキビストと同等の能力と見識を有する研究者に育てる。

9. 研究教育拠点形成活動実績

目的の達成状況

1) 世界最高水準の研究教育拠点形成計画全体の目的達成度

本プログラムは、今まで人類文化研究の資料として必ずしも十分に認識されてこなかった非文字の事象を資料化し、分析・整理し、利用可能な情報として世界の関連諸科学の研究に供しようとする計画であった。特に非文字の事象から図像、身体技法、環境・景観を選び出し、それぞれの資料化の方法、資料の整理・分析の方法、情報発信の方法などを開発し、それを発信することに絞って研究を展開した。

図像については、日本常民文化研究所が40年前に『絵巻物による日本常民生活絵引』という独創的な図像情報の整理・発信の試みを行っていた。本プログラムでは、その成果を前提に、その問題点を検証し、研究の現水準に対応した絵引を制作すること、そして絵引という日本で考案された方式を世界の共有財産にし、日本以外の地域でも図像資料整理・発信の方法として可能かどうかを具体的な作業を通して検討した。最終年度には9冊に及ぶ絵引を編纂刊行した。またそれをもとに二つの絵引データベースを制作し公開した。

身体技法に関しては、人々が日常的に行っている行為そのものを把握し、記録して資料化する方法自体が困難な問題を抱えており、その資料化の方法の開発に努力した。大きく身体技法と感性を把握する研究と用具・道具を手がかりに身体技法に迫る研究の二つに分かれて研究を展開した。最終年度には成果報告論文集を刊行し、そこには身体技法を解析する事例研究を収録したDVDを添付した。

環境・景観については、環境・景観そのものを歴史的展開の中で把握する共同研究と環境・景観に人間活動・災害の痕跡を探る共同研究を推進した。前者については、80年前撮影の写真を起点に景観の経年変化を調査分析し、後者については日本の海外活動がもたらした景観変更および地震災害の痕跡を調査し、実態を明らかにした。研究成果報告書を2冊刊行し、また四つのデータベースを公開した。

以上の図像、身体技法、環境・景観の成果を統合し、理論的に体系化することを目指して以下の三つの研究を展開した。第一に、特定地域における調査研究を進め、ウェブ上でインターネット博物館として公開し、別にそれを記録した成果報告書をまとめた。第二に、

博物館展示として統合する方法を模索し、実験展示を実施した。また、高度専門職学芸員養成策を提言する報告書を出した。第三に、非文字に関する理論総括研究を展開し、理論的諸問題を検討した報告書を刊行した。

以上のように、5年間の研究はほぼ順調に進み、最終的に18冊の研究成果報告書、8種類のデータベースに結実した。このことによって本プログラムの目的は概ね達成したと言えるであろう。

2) 人材育成面での成果と拠点形成への寄与

本プログラムの拠点の一つである歴史民俗資料学研究科では、博士後期課程修了の学生たちが他研究機関に勤務して研究に従事し、活躍している実績を持っていたが、COEに採択されることによって、在学学生たちの研究意欲も高まり、本プログラムが研究条件を準備したこともあって、若手研究者の養成はさらに進んだ。本プログラムでは、博士後期課程修了者および単位取得満期退学者を対象にCOE研究員(PD)を設け、年間通しての雇用を行い、自己の研究に従事すると共に、本プログラムの研究事業にも参加させた。また、博士後期課程の学生にはCOE研究員(RA)を設け、在籍のまま採用し、事業推進担当者などの指導を受けて研究を進めるようにした。そして、彼等を海外提携研究機関に派遣して、海外での調査経験を積ませた。

その結果、本プログラムを拠点としたPD、RAを中心とした若手研究者の活動が活発になり、毎年研究成果を収録する『年報』及び研究成果報告書『非文字資料研究の可能性—若手研究者研究成果論文集』に多くの論文を掲載することができた。また国際シンポジウムのプレシンポジウムを若手研究者の企画で実施し、大きな成果を挙げた。さらに、データベース作成に際して、その設計からデータ収集、解析まで若手研究者が大きな力を発揮した。本プログラムの達成した成果には若手研究者の貢献が大きい。

これらを通して成長した若手研究者のなかには、著書を著し刊行した者が2名、海外でのフィールドワークに従事した者11名に及んだ。そして、その実績が認められて大学専任講師に就任した者1名、同非常勤講師に就任した者3名、学術研究を行う公務員に就職した者1名、他大学のPDに採用された者1名にのぼった。本来、博士後期課程の入学定員3名という小規模な大学院歴史民俗資料学研究科を中心としている本プログラムとしては、大きな成果と言って間違いな

い。

3) 研究活動面での新たな分野の創成や、学術的知見等

非文字資料のうち画像資料については、日本で産み出された絵引という画像整理、発信の方法を世界的な共有財産にできるかどうかを検討することに課題を設定してきた。絵引という画像資料の整理法・発信法は世界的に類例がない。本事業では、絵引という編纂方式を世界の共有財産にするべく、『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』を編纂し、絵引を世界各地で利用できるようにすると共に、日本以外の地域の画像資料について絵引編纂が可能かどうかを検討する作業を行い、『東アジア生活絵引』2冊を刊行した。これらによって、画像資料活用方法として絵引が世界的に見ても有効であることを明らかにした。本プログラムの刊行した絵引を模範にして世界各地で絵引が編纂されるものと予想される。

また、身体技法という資料化が極めて困難な事象について、種々資料化を試みたが、そのなかで角度変化のデータを直接取得できる磁気式モーションキャプチャを用いて東アジアの民俗芸能と伝統芸能の定量比較を行い、記録作成を通じて資料化することに成功した。特に芸能の所作を記録する方法として確立し、単に研究資料としての記録化だけでなく、芸能の伝承を客観的に行うための方法を開拓したことになり、今後実践的に採用されていくものと予想される。また、用具と身体技法の関係性の調査によって、用具の地域的偏差が、日本列島における文化形成過程を解明する有力な資料となることを発見した。

地震や津波などの災害痕跡を、現地の状況だけでなく、断片的に残された写真、絵はがき、スケッチ画、地図などの資料と付き合わせることで確定し、それを通して災害の実態を把握する方法を試みたが、これは自然科学的な地形・地質研究とは異なる新たな研究法の開拓につながり、災害研究の学際的研究に大きく貢献するものと判断している。

4) 事業推進担当者相互の有機的連携

本プログラムの研究組織は、大学としての計画推進をする「拠点形成委員会」(委員長は副学長)の下に、拠点リーダーを長とし、研究遂行責任者およびCOE事務局長をメンバーとする「研究推進会議」を設置し、その下に事業推進担当者および学内外から参加を得た共同研究員を6班に分けるという構成をとった。各班は、それぞれの研究課題を達成するために定期的に

研究会を開催し、また現地調査を行った。さらに、問題意識の共有と全体的調整のために、研究参画者全員による全体会議・全体研究会を適宜開催し、各班の成果を報告し検討すると共に、拠点リーダー及び研究推進会議から研究の方向、進め方について指示、指導を行い、有機的連携を図った。

本プログラムを担うのは主として人文科学、社会科学の研究者であり、本来の研究スタイルは基本的に個人研究である。共同研究方式の経験は少なく、研究過程を共同で実施し、研究成果を共有することに慣れていなかった。プログラム発足当初には多くの不協和音があったが、頻繁に開催した研究会、フィールドワークを通して次第に共同研究にも慣れ、互いに協力して一つの研究を行うという考えが定着した。今までの多くの共同研究は、研究過程を共同しても、結果は個人の個別論文として発表されることが一般的なスタイルであったが、本プログラムが達成したのは、研究成果をも共同の一つの作品として完成させたことである。殊に9冊に及ぶ絵引は、専門分野の異なる参画者の総力を結集して編纂したもので、共同研究の一つの模範的な姿を示し、事業推進担当者の有機的連携の成果であると言える。

5) 国際競争力ある大学づくりへの貢献度

国際競争力ある大学の一つの条件は、世界的にみても際立った特色のある研究・教育を行っているかにかにある。その点、本プログラムが取り組んだ非文字資料の体系化という研究課題は世界的にも類例のない課題であったため、民俗学、歴史学、人類学などの研究者から国際的な関心を集めた。また、その活動の成果として研究機関の国際的ネットワークを形成することができた。これは、従来から特色ある研究・教育機関として広く国際的に注目されてきた日本常民文化研究所・大学院歴史民俗資料学研究所のさらなる発展に大きく寄与した。

6) 国内外に向けた情報発信

本プログラムは最初の2年間は調査を行い非文字事象の資料化を行う段階と位置づけ、専ら調査研究を進めた。3年目に入ってからその蓄積されたデータを基礎に本格的な研究を展開させたが、その過程で研究成果の発信も本格化させた。研究成果の発信手段としては紙媒体の印刷物、インターネット上のホームページ、研究集会、展示の四つであった。紙媒体としては初年度から、その年の研究成果論文を収録した『年報』(4

号まで刊行)、新知見を速報する『ニューズレター』(季刊、19号まで刊行)、そして最終年度に取りまとめた18冊の研究成果報告書である。また研究過程で獲得した資料や情報は随時『調査研究資料』(5冊刊行)として、研究集会の記録は『シンポジウム報告』(4冊刊行)として印刷刊行した。インターネット上にはホームページを開設し、各種案内や研究活動を掲載して発信しただけでなく、開発作成したデータベースを公開した。また画像、身体技法、環境・景観を特定地域で統合把握したインターネット博物館を公開した。研究集会は大小様々な規模で開催したが、3年目からは毎年1回国際シンポジウムを開催し、世界各地から非文字資料の研究を行う研究者を招き、その研究蓄積を聞き、また本プログラムの成果に対するコメントを出して貰った。展示は、非文字資料の統合・体系化を展示という方法で発信する実験展示として5年目に実施した。

7) 拠点形成費等補助金の使途について(拠点形成のため効果的に使用されたか)

本プログラムの研究事業は、その基本部分は補助金によって実施されたことは言うまでもない。その点で、多くの成果を挙げることができたのは補助金を適切かつ効果的に使用したことの証左と言えよう。特に、日本国内のみならず、東アジア、ヨーロッパ、アフリカ、中南米などでフィールドワークを行い、その成果を研究過程で活用し、研究成果に結実させることができた。世界的に活躍できる若手研究者の養成を目指して、海外提携機関へCOE研究員を派遣し、また海外提携研究機関から若手研究者を迎え、研究を展開させ、少なからずの若手研究者が学界などで活躍するようになったことは、補助金を効果的に使用したことを示している。

今後の展望

当初本プログラムの計画を策定した段階において、終了時には非文字資料の収集・整理・保存・発信についての体系化を実現し、人類文化研究における非文字資料の活用について具体的なあり方を広く提供することを計画していた。今後の課題の一つは、5年間の成果を基礎に非文字資料の有効的活用について理論的、実践的に検討し、その成果を発信していくことである。

また、当初掲げた5年後の予想は、神奈川大学が世界の非文字資料研究の中核になるという点であった。すでに5年間の研究期間中に、多くの海外研究機関と

提携関係を結び、研究交流を積み重ねてきたが、それを受けてさらに世界各地の非文字資料を扱う関連研究機関また個人研究者を組織して、世界的ネットワークを形成し、世界的に非文字資料の研究情報を集約し、それを世界に発信する世界的研究拠点になることを目指している。

これらを遂行するために、神奈川大学では、21世紀COEプログラムの後継発展組織として「非文字資料研究センター」を4月1日付けで発足させ、拠点リーダーをセンター長に据えて、研究を開始した。その運営のために、大学の1学部の経常予算に匹敵する額を計上し、研究の進展を期しており、上記の二つの目標を順次達成していくことになる。センターはCOEの蓄積を基礎に発展させた研究成果を順次とりまとめ公表すると共に、COEの5年間では取り扱えなかった新たな研究課題を追究し、非文字資料研究の新たな地平を切り開くことになる。

その他(世界的な研究教育拠点の形成が学内外に与えた影響度)

激しい競争を経て、私立大学である本学が21世紀COEプログラムに採択されたことは、それ自体が大学内に大きな影響を与えた。大学自体がCOEの拠点形成に積極的に取り組む姿勢を見せ、そのための制度的整備、財政的支援を行い、事務的支援体制を作り上げた。それらについては全学的に合意と理解が得られ、その結果、学内の各研究所、各大学院研究科の研究への意欲を増大させ、学術フロンティア事業、ハイテクリサーチセンターなど大規模な競争資金の獲得につながった。

本プログラムの課題名として掲げた「非文字」という言葉は、従来ほとんど用いられなかった用語であり、本プログラムの始動と共に発信されることとなった概念と言える。多くの研究者にとっては非常に新鮮に聞こえ、その内容と共に注目を浴びた。特に海外の研究者が"himoji"という語に注目して、その研究成果の発信に大きな期待を寄せてくれた。5年間の拠点形成の活動によって「非文字」(himoji)を掲げた世界的研究拠点として、その存在は広く認知されるようになった。

21世紀COEプログラム 平成15年度採択拠点事業結果報告書

機 関 名	神奈川大学	拠点番号	J23
拠点のプログラム名称	人類文化研究のための非文字資料の体系化 (Systematization of Nonwritten Cultural Materials for the Study of Human Societies)		
1. 研究活動実績			
この拠点形成計画に関連した主な発表論文名・著書名【公表】			
<ul style="list-style-type: none"> ・事業推進担当者(拠点リーダーを含む)が事業実施期間中に既に発表したこの拠点形成計画に関連した主な論文等〔著書、公刊論文、学術雑誌、その他当該プログラムにおいて公刊したもの〕 ・本拠点形成計画の成果で、ディスカッション・ペーパー、Web等の形式で公開されているものなど速報性のあるもの <p>著者名(全員)、論文名、著書名、学会誌名、巻(号)、最初と最後の頁、発表年(西暦)の順に記入 波下線() : 拠点からコピーが提出されている論文 下線() : 拠点を形成する専攻等に所属し、拠点の研究活動に参加している博士課程後期学生</p>			
福田 アジオ・鈴木 陽一			
【著書】			
・金貞我・佐々木睦・鈴木陽一・福田アジオ共編著、『東アジア生活絵引 中国江南編』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、1-155、2008年2月			
福田 アジオ			
【著書】			
1. 金貞我・中野泰・福田アジオ共編著、『東アジア生活絵引 朝鮮風俗画編』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、1-177、2008年1月			
2. 富澤達三・中村ひろ子・福田アジオ・山本志乃共編著、『日本近世生活絵引 東海道編』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、1-138、2007年12月			
【論文】			
1. 「生活絵引編纂の世界的意義」『図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、60 - 72、2007年3月			
2. 「図像資料としての素人絵 生活絵引き編さん資料としての可能性」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第2号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、1 - 16、2004年12月			
大里 浩秋			
【論文】			
1. 「杭州日本租界のたどった道」大里浩秋・孫安石編著、『中国における日本租界 重慶・漢口・杭州・上海』御茶の水書房、96 - 126、2006年 3月			
2. 「『浙江文化研究』初探」大里浩秋・孫安石編著、『中国における日本租界 重慶・漢口・杭州・上海』御茶の水書房、127-165、2006年 3月			
3. 「在華紡の居住環境について 上海の事例」『環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解読』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、17 - 52、2007年12月			
香月 洋一郎			
【論文】			
1. 「『澁澤写真』の活用に向けての一試行」『「景観」と「環境」についての覚書』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、3 - 32、2007年12月			
2. 「風景としての情報」『手段としての写真 「澁澤写真」の追跡調査を中心に』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、1 - 34、2007年3月			
3. 「集落景観分析への 試論」『環境と景観の資料化と体系化にむけて』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、1-76、2004年12月			
川田 順造			
【著書】			
・『もうひとつの日本への旅 モノとワザの原点を探る』中央公論新社、1-286、2008年3月			
【論文】			
1. 「非文字資料による人類文化研究のために 感性の諸領域と身体技法を中心に」『身体技法・感性・民具の資料化と体系化』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、3 - 30、2008年3月			
2. 「感性の人類学のための予備的覚え書き」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第3号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、175 - 182、2006年3月			
3. 《調査報告》「メキシコと内蒙古住民の身体技法についての調査の初次的報告 人力運搬法と座法を中心に」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第2号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、219 - 238、2004年12月			
北原 糸子			
【論文】			
1. 「災害メディアと景観変容」『環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解読』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、109 - 119、2007年12月			
2. 「海外における災害研究の新しい傾向について」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第4号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、93 - 106、2007年3月			
3. 「関東大震災の写真(東京都慰霊堂保管)について」『歴史災害と都市 京都・東京を中心に』立命館大学21世紀COEプログラム・神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、57 - 72、2007年2月			
4. 「メディアとしての災害写真 明治中期の災害を中心に」『版画と写真 19世紀後半 出来事とイメージの創出』神奈川大学21世紀			

紀COEプログラム研究推進会議、73 - 95、2006年3月

橋川 俊忠

【論文】

- ・『「非文字資料の体系化」についての理論的諸問題』『非文字資料研究の理論的諸問題』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、73 - 90、2008年3月

河野 通明

【論文】

1. 「身体技法の違いにもとづく古代日本列島の民族分布の復原 東北地方の木摺白調査からの古代日本列島の民族分布の復原への見直し」『身体技法・感性・民具の資料化と体系化』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、133 - 195、2008年3月
2. 「民具という非文字資料の体系化のための在来農具の比較調査 『民具からの歴史学』の有効性の追究と方法論確立の試み」『身体技法・感性・民具の資料化と体系化』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、197 - 254、2008年3月
3. 「神奈川大学21世紀COEプログラムにおける『非文字資料の体系化』とは何か」『非文字資料研究の理論的諸問題』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、49 - 71、2008年3月
4. 「日本の掣に見られる朝鮮系・中国系とその混血型」『図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、184 - 199、2007年3月

齊藤 隆弘

【論文】

1. "Total-variation approach and wavelet shrinkage for color-image denoising with inter-channel cross-correlations." Proc. The 3rd IEEE Int. Symposium on Communications, Control and Signal Processing.(ISCCSP 2008) March 2008
2. 「Total-Variation正則化を用いたシャープニング デモザイキング法」『映像情報メディア学会誌 / 61(11)』1621-1632, 2007年11月
3. 「実用化に向けた経年劣化シネマ映像のデジタル修復に関する検討」『画像電子学会誌』2007年7月
4. 「デジタル画像処理による古い映像フィルムの修復とデジタルフィルムアーカイブの構築」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第1号、169-187、2004年3月

佐野 賢治

【論文】

1. 「地域研究と情報学の連携 只見町インターネット・エコミュージアムの可能性」『地域情報学の構築 新しい知のイノベーションへの道』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、1 - 8、2008年3月
2. 「文化情報発信システムとしてのインターネット博物館 大学・地域博物館の連携を中心にして」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第3号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、1 - 15、2006年3月

ジョン ボチャラリ・前田禎彦

【著書】

1. ジョン ボチャラリ・君康道・金貞我・鈴木彰・前田禎彦・蔡文高共編著、*Multilingual Version of Pictopedia of Everyday Life in Medieval Japan compiled from picture scrolls, vol.1*, 『マルチ言語版 絵巻物による日本常民生活絵引』第1巻(本文編)(語彙編)、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、1-191、1-91、2008年3月
2. ジョン ボチャラリ・君康道・金貞我・鈴木彰・前田禎彦・蔡文高共編著、*Multilingual Version of Pictopedia of Everyday Life in Medieval Japan compiled from picture scrolls, vol.2*, 『マルチ言語版 絵巻物による日本常民生活絵引』第2巻(本文編)(語彙編)、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、1-219、1-106、2007年6月

ジョン ボチャラリ

【論文】

- ・『「絵巻物による日本常民生活絵引」英訳の課題と問題点』『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第1号、神奈川大学21世紀COEプログラム推進会議、1 - 5、2004年3月

鈴木 陽一

【論文】

1. 「『姑蘇繁華図』と18世紀中国におけるリアリズムの曙光」『図像から読み解く東アジアの生活文化』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、13 - 18、2006年6月
2. 「中国の図像についてのノート」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第1号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、20 - 23、2004年3月

孫 安石

【論文】

- ・「漢口の都市発展と日本租界」大里浩秋・孫安石編著『中国における日本租界 重慶・漢口・杭州・上海』御茶の水書房、63-95、2006年 3月

田上 繁

【論文】

- ・「大学院における学芸員教育の現状」『高度専門職学芸員の養成 大学院における養成プログラムの提言』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、31 - 44、2008年3月

田島 佳也

【著書】

1. 菊池勇夫・田島佳也共編著『日本近世生活絵引 北海道編』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、1-116、2007年12月
2. 泉雅博・田島佳也共編著『日本近世生活絵引 北陸編』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、1-70、2008年3月

【論文】

- ・『「近世生活絵引」作成に向けての試み 土屋又三郎『農業図絵』を題材にして』『図像・民具・景観 非文字資料から人類文

化を読み解く』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、74 - 95、2007年3月

中島 三千男

【論文】

1. 中島三千男・津田良樹・富井正憲共同執筆「『海外神社』跡地に見る景観の変容とその要因」『環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解読』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、55 - 93、2007年12月
2. 津田良樹・中島三千男・堀内寛晃・尚峰共同執筆「旧満州国の「満鉄附属地神社」跡地調査からみた神社の様相」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第4号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、203 - 289、2007年3月
3. 津田良樹・中島三千男・金花子・川村武史共同執筆「旧朝鮮の神社跡地調査とその検討 全羅南道、和順郡を中心に」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第3号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、285 - 382、2006年3月

中村 政則

【論文】

1. 「極限状況に置かれた者の語り - ナガサキの被爆者の場合」『オーラル・ヒストリー学会誌』第3号、日本オーラル・ヒストリー学会、2007年9月
2. 「文字資料と非文字資料のはざま オーラル・ヒストリーの可能性」『地域情報学の構築 - 新しい知のイノベーションへの道』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、17 - 23、2008年3月

西 和夫

【論文】

1. 「明治6年の住宅建築絵解き」『非文字資料から人類文化へ 研究参画者論文集』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、3 - 25、2008年3月
2. 「非文字資料としての建築図面」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第4号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、1 - 23、2007年3月
3. 「1枚の写真と23枚の絵 東京下落合の歴史を探る」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第2号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、62 - 73、2004年12月

廣田 律子

【論文】

1. 廣田律子・海賀孝明・岡本浩一共同執筆「モーションキャプチャによる芸能の定量比較研究」『身体技法・感性・民具の資料化と体系化』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、31 - 94、2008年3月
2. 廣田律子・長瀬一男・海賀孝明・岡本浩一共同執筆「モーションキャプチャを使った芸能比較研究の試み」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第3号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、188 - 212、2006年3月

的場 昭弘

【論文】

1. 「人類文化研究のための非文字資料の理論的課題について」『非文字研究の理論的諸問題』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、1 - 48、2008年
2. 「非文字資料はいかに認識されるか - 知覚をめぐる哲学的諸問題 - 」『図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、34 - 51、2007年5月

三鬼 清一郎

【論文】

- ・「蔚山城合戦図をめぐる」『環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解読』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、7 - 16、2007年12月

山口 建治

【論文】

- ・「方相・傀儡・郭禿・鍾馗 『天籟』もう一つの身体技法」『非文字資料から人類文化へ 研究参画者論文集』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、27 - 37、2008年3月

櫻村 賢二

【論文】

- ・「ユニバーシティ・ミュージアムと学芸員養成課程」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第4号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、125-169、2007年3月

小野地 健

【論文】

- ・「クシャミと人類文化 - 身体音からの人類文化研究の体系化のための試論 - 」『非文字資料研究の可能性 - 若手研究者研究成果論文集 - 』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、89-107、2008年3月

土田 拓

【論文】

- ・「アルバムのかなかの戦後開拓」『非文字資料研究の可能性 - 若手研究者研究成果論文集 - 』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、251-264、2008年3月

彭 偉文

【論文】

- ・「『姑蘇繁華図』における女性の世界」『非文字資料研究の可能性 - 若手研究者研究成果論文集 - 』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、53-72、2008年3月

国際会議等の開催状況【公表】

(事業実施期間中に開催した主な国際会議等の開催時期・場所、会議等の名称、参加人数(うち外国人参加者数)、主な招待講演者(3名程度))

【国際シンポジウム】

1. 開催時期 2005年11月26日(土),27日(日)
 場所 神奈川大学横浜キャンパス16号館セレストホール
 会議等の名称 第1回COE国際シンポジウム「非文字資料とはなにか - 人類文化の記憶と記録 -」
 参加人数 221名(29名)
 主な招待講演者 セバスチャン・ドブソン(写真歴史家)
 コンスタンチン・グーバー(ロシア海軍博物館チーフアーティスト)
 田耕旭(高麗大学校民俗学研究所所長)
2. 開催時期 2006年10月28日(土),29日(日)
 場所 神奈川大学横浜キャンパス16号館セレストホール
 会議等の名称 第2回COE国際シンポジウム「図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く」
 参加人数 194名(21名)
 主な招待講演者 アラン＝マルク・リュ(リヨン第3大学教授)
 王正華(台湾・中央研究院近代史研究所研究員)
 金光彦(仁荷大学校名誉教授)
3. 開催時期 2008年2月23日(土),24日(日)
 場所 神奈川大学横浜キャンパス16号館セレストホール
 会議の名称 第3回COE国際シンポジウム「場の記憶・からだの記憶 非文字資料研究の新地平」
 参加人数 260名(22名)
 主な招待講演者 クリスティーナ・ラフィン(ブリティッシュコロンビア大学助教授)
 尹紹亭(雲南大学教授)
 アルベール・ピアンヴニユ・アコハ(アボメ＝カラヴィ大学教授)

【国際研究集会】

1. 開催時期 2005年7月23日(土)
 場所 神奈川大学横浜キャンパス17号館215室
 会議の名称 袷いと儀礼の技法
 参加人数 70名(8名)
 主な招待講演者 顧希佳(杭州師範学院教授)
 アレクサンドル・グラ(立命館大学専任講師)
2. 開催時期 2005年12月10日(土)
 場所 神奈川大学横浜キャンパス16号館第2会議室
 会議の名称 図像資料の体系化と情報発信
 参加人数 35名(6名)
 主な招待講演者 載立強(遼寧省博物館研究員)
 張長植(韓国国立民俗博物館民俗研究科学芸研究官)
3. 開催時期 2007年3月2日(金)
 場所 神奈川大学横浜キャンパス1号館804室
 会議の名称 中国における日本租界研究
 参加人数 70名(5名)
 主な招待講演者 陳祖恩(東華大学教授)
4. 開催時期 2007年10月26日(金)
 場所 神奈川大学横浜キャンパス1号館308室
 会議の名称 中国進出の日本企業とその建築 - 戦前の紡績業を事例として
 参加人数 40名(3名)
 主な招待講演者 庄維民(山東省社会科学院研究員)

2. 教育活動実績【公表】

博士課程等若手研究者の人材育成プログラムなど特色ある教育取組等についての、各取組の対象（選抜するものであればその方法を含む）、実施時期、具体的内容

本プログラムでは、博士後期課程修了者で研究職に就いていない者および博士後期課程在籍学生を対象にCOE研究員（PD・RA）制度を設け、さらに派遣・訪問研究員制度の導入、大学院博物館資料学科目群の開設など、研究と教育の一体化による世界水準の若手研究者の養成を図った。

(1) COE研究員（PD・RA） COE研究員（PD）は、学内外の35歳未満の博士学位取得者（単位取得満期退学者を含む）を公募により採用し、日本学術振興会特別研究員と同程度の給与を支給し、研究に専念できる条件を整えるものである。このPDについては、その専門に依りて本COEプログラムの研究課題の一部を担当させ、自立した研究者としての資質の向上を図った。本プログラムの推進中の5年間で実数9、延べ16名を採用した。そのうちPD1名が国立大学専任講師に採用され、3名が本学の非常勤講師として採用された。

一方、RAに対しては、学内の博士後期課程院生を在籍のままCOE研究員として採用し、事業推進担当者の指導を受けつつ調査研究に参画させ、研究課題に関する学力を向上させるとともに、学位論文作成に向けての指導を行った。本プログラム推進中の5年間でRA実数12、延べ22名を採用した。そのうち3名が博士の学位を取得した。

(2) 派遣・訪問研究員 PD・RAをはじめ拠点研究科の博士後期課程在籍者を派遣研究員として海外提携機関（8機関）に派遣した。研究を国際的水準にまで高めるため、提携研究機関の研究者と連絡を密にし、教育研究指導の内容を充実させた。派遣研究機関は中国・韓国・ブラジル・カナダなどであるが、現地での資料収集と調査により各自の研究は飛躍的に進展した。本プログラム推進中、実数9名延べ13名を派遣した。

また、海外提携研究機関の若手研究者を招いて共同研究を推進する訪問研究員制度についても、期待以上の成果が得られた。本プログラムにおける非文字資料の研究は世界に対して輸出可能なモデルであり、外国人留学生及び研究員の受け入れは、それを具体化する有力な方法であった。推進期間中、合計24名の若手研究者を受け入れた。

(3) 博物館資料学関連科目群の開設とCOE教員 世界の資料保存機関専門家である欧米のキュレーターやアーキビストなどと対等な立場で資料について交渉や研究交流ができる人材を育成するため、歴史民俗資料学研究科では、COEプログラムに連動させ2004年度からカリキュラムを改定し、博物館資料学関連科目群を新たに設置した。博物館資料学をCOE教員（特任教授）1名、博物館情報学、博物館展示学、博物館図像資料学をCOE教員（非常勤講師）3名がそれぞれ担当した。併せて、選択必修科目にネイティブスピーカーによる英語、中国語、日本語（外国人留学生）による講義科目を開設して、語学力の向上を図った。なお、4名のCOE教員については、本プログラム終了後も、歴史民俗資料学研究科の講義を継続して担当している。

(4) 日本常民文化研究所特別研究員 本COEプログラムの拠点の一つである日本常民文化研究所では、博士後期課程退学者及び学位取得者10名を特別研究員として採用し、所蔵資料の図像・写真・民具資料や文献史料を利用した研究を支援した。また、常民参考室の企画に参加し、展示手法・文化情報発信の開発の試みに参加するなど、本プログラムと連携しつつ、教育研究の実績をあげた。

(5) 教育の成果と進路 本COEプログラム採択後の教育環境の下で、歴史民俗資料学研究科では14名の院生が新たに課程博士の学位を取得した。そのうち11名が専ら非文字資料を扱う民俗民具研究分野の課程博士であり、これはCOEプログラムによる人材育成の成果があらわれたものである。PDやRAの論文・調査報告などの研究成果は、『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』や紀要『歴史民俗資料学研究』に主に掲載され、公開された。また、本プログラムの若手研究者のうち13名による研究成果報告書『非文字資料研究の可能性』を刊行した。ほかにPD2名の学位論文も著書として公刊された。なお、この間、歴史民俗資料学研究科の課程博士修了者1名が私立大学の専任助教授、1名が公立短期大学の専任講師として採用され、中国言語文化専攻の修了者1名も本学の専任講師、1名が他大学の専任講師として、それぞれ教育研究に当たっている。

21世紀COEプログラム委員会における事後評価結果

(総括評価)

設定された目的は十分達成された

(コメント)

拠点形成計画全体については、日本常民文化研究所の長年の蓄積を生かしつつ、非文字資料の資料活用に関する理論的研究及び実践的手法を発展させ、国際的に利用しうる非文字資料のデータベース化が実現されており、設定された目的は十分に達成されたと評価できる。特に大学全体として、多様かつ強力な支援を行ってきたことは高く評価できる。

人材育成面では、人材育成の体制が必ずしも十分でなかった本分野において、博士課程在学者だけでなく、幅広い次世代研究者に呼び掛け、研究水準の向上と国際化に努め、学位取得者数の上昇傾向に見られるような具体的成果をあげており、大きな進捗が見受けられ、評価できる。

研究活動面については、非文字資料、特に絵引や身体技法の分析手法の深化とデータベース化に成果をあげており、本分野の国内外の研究者の知的基盤を拡大することができたことは高く評価できる。

補助事業終了後の持続的展開については、拠点形成期に蓄積された非文字資料に関する研究蓄積に加えて、「非文字資料研究センター」の設置など大学全体としての組織的支援強化が明確にされており、本分野の国際的研究教育拠点としての展開が可能である。特に非文字資料の多様な体系化方法やアーキビストの養成において、今後とも着実な発展を実現し、国際的拠点として確立することを期待する。